

## パウロとユダヤ教

### はじめに

#### —古代末期におけるユダヤ教とキリスト教—

アダ・タガー＝コヘン

「日本におけるユダ人とユダヤ教」プロジェクトの第4回研究会議が2016年9月24日（土）、13:00-17:00に、同志社大学神学部の村山盛葦教授と勝又悦子准教授による公開講演会とワークショップという内容で開催された。今研究会では「古代末期におけるユダヤ教とキリスト教—その相互影響について」というテーマのもと、各研究者が各自の研究の視点から、ユダヤ教とキリスト教が文書や価値観を共有していたことを示し、この時代においてこれらの宗教がどのようにして分岐し始めたかについて発表した。

過去10年から20年において、キリスト教をユダヤ教から分離して二つの全く異なった宗教を創出した古代末期の歴史的、宗教的な展開を明らかにしようとする研究が増えてきた<sup>1</sup>。

村山教授は、キリスト教信仰の立役者であるタルソスのパウロがユダヤ教を尊重し、また、彼の著作が古代末期のユダヤ教の諸分派の一つと強い結びつきをもっており、その分派がキリスト教思想の主流の元になったことを示した。また、村山教授は、普遍主義や神の審判、律法の遵守（ユダヤ教のハラハ）などのユダヤ思想の主題がヘブライ語聖書に起源をもち、それらがパウロによって新たに解釈され、新しい宗教の土台となったことを指し示した。ユダヤ教とキリスト教はそれぞれの別個のアイデンティティーを維持しようとし、そのため、それぞれのグループにおいて外国人への姿勢、より正確に言えばそれぞれの宗教が信者として誰を受け入れるかが一番の重要な問題となった。

勝又准教授は、これらの問題について主に当時のユダヤ人コミュニティーの見解に注目した。当時のラビ・ユダヤ教文献における「パウロの不在」を紹介したあと、清い食べ物に関するパウロの律法の解釈、そしてさらに重大なことには、全般的にユダヤ教律法を遵守する自由についての彼の解釈にふれた。この問題は、食物規定や偶像崇拜の課題を議論する一方、外国人による礼拝や諸宗教、また「異邦人」一般に対するユダヤ教資料に見られる態度について議論することへと繋がった。また、勝又准教授はラビ・ユダヤ教文献に基づきながら、これらの課題

がユダヤ教律法に従う際の融通性を促進した事実、そして聖書律法が信者に選択の自由を与えている事実を指摘した。結論として、勝又准教授はラビ・ユダヤ教グループがラビの解釈に従った厳格な律法の遵守を選び、一方でパウロのキリスト教が多数の非ユダヤ教徒を受け入れるために律法に従うか、部分的に従うか、あとになって全く従わないかという選択の自由を取り入れたことを示唆した。

結果的に、両研究者は自らの視点で資料を考察し、ユダヤ教がその主要な宗教的機構の解体の結果として今にも変化しようとしていたとき、一つの宗派がどのようにして数百年の間にユダヤ教と競り合う宗教へと発展することに成功したかという、古代末期における同様の問題を扱った。

この研究会が、同志社大学神学部と一神教学際研究センターにかかわる古代末期の研究者による同研究の成果を日本の学術コミュニティー、また日本社会に提供する機会の始まりとなることを私たちは望んでいる。

---

## 注

- <sup>1</sup> 例えば、『ユダヤ学会議 vol. 5 : 古代・中世初期のユダヤ教とキリスト教』（一神教学際研究センター、2012年、<http://www.cismor.jp/jp/archives/coe/出版物/ユダヤ学会議/>）、特に、Peter Schäfer, “Jewish Responses to the Emergence of Christianity,” pp. 120-134 を見よ。また、1976年に Martin Hengel によって始められ、Brill 社によって出版されているシリーズ *Ancient Judaism and Early Christianity*（の過去5年間の各巻）も参照。